

学び合いによってコミュニケーション力を高める授業の工夫

菅原 信一

英語科 端崎 圭一

小川 正清

1. 本校生徒の実態

本校の研究主題である「共に学ぶ生徒の育成」に必要なのは「コミュニケーション力」である。その力を「他者理解力」と「自己表現力」と置き換えて、英語科として生徒の実態を把握すると、以下のようになる。

① 「他者理解力」に関わる本校生徒の実態

普通の授業においては、学年やクラスによってばらつきはあるものの、理解するために「聞く」ということに集中しきれない生徒が目につく。教師の話だけでなく、級友の発言や発表などの場面でも、自分の思いついたことを隣の生徒に話して、聞くことを中断してしまう生徒が少なからず存在する。したがって、発表や発言に対する積極的な付け加えや質問などが少ない。また、よく聞こえなかったり、相手が言っていることがよく分からなくても、その疑問が自分にとって大切なことではないと判断したとき、それらをそのままにして解決しようとしないうちにもしばしばある。

② 「自己表現力」に関わる本校生徒の実態

自己表現の手段として「書くこと」と「話すこと」の2つがあるが、分かりやすく「書くこと」は比較的得意である。読み手に対して分かりやすい平易な表現を用いたり、強調したいことをただ繰り返すのではなく、表現を変えて書いたりすることには慣れてきていると思われる。

ただし、分かりやすく「話すこと」については苦手な生徒が多く、トレーニングが不十分である。例えば、緊張したり、恥ずかしかったりすると声が小さくなる生徒、気持ちを表情やジェスチャーで表すことが苦手な生徒、話すスピードが速すぎたりする生徒、原稿に頼ってしまい、場の状況に応じた応答ができない生徒、聞き手はそう意識していないにも関わらず間違いを恐れ、自分の言いたいことよりも無難な答えを選んでしまう生徒、相手とアイコンタクトを取れない生徒など、課題は多い。

以上のことから、本校生徒の実態としては「共に学び合う」ことに不得手な生徒の実態が浮かび上がってくる。英語の授業が、暖かい人間的なコミュニケーションの場になってほしい、と教師側は望んでいるが、実態は話し手側の「相手にしっかりとわかりやすく伝えよう」とする態度、聞き手側の「相手の話すことをしっかり受け止め、解ろう」とする態度が、それぞれ不十分だといえることができる。このような実態を受け、英語科として「学び合いによってコミュニケーション力を高める授業」を実践していかなければいけないと考えた。

2. 研究の概要

(1) 研究経過

① 平成16年度の研究

この年度の研究では、[確かな学力]の中の「意欲」と「表現力」に焦点を絞り、それらが生徒の発達段階とどのような関係があるのか、また、その発達段階に応じてどのような題材を取り上げ、どのような授業形態をとったらよいかの探求をおこなった。そこで明らかになったことの一つに、「1年

生から2年生になる時に、習った言語材料をそのまま使った単純な表現から、しだいに細やかな描写や、いろいろな角度から1つのものを説明しようとする」というものであった。別の言い方をすれば、「1年生」と「2・3年生」の間に発達段階の大きな段差が見られたということである。

この研究後の課題は、大きな段差を境に中学1年生は小学生と、中学校2・3年生は高校生と、発達段階において、どのような類似点や差異があるのだろうか。そして、そこを見つめることは、中1プロブレムやわたりの問題の解決の糸口を見つけることにつながるのではないかということに向かっていった。

② 平成17年度の研究

前年度の課題を受け、この年度から、まず、附属小学校との連携をより深めることを目標にした。ただ、先方の事情を考慮し異校種間交流授業などの踏み込んだ実践はしなかった。そこで、この年度の研究では、小学校の授業をできるだけ参観し、そこから見とれる小学生の発達段階や授業の特徴を整理・分析する。そして、それを中学校教育にどのように結び付けていくのか、どう発展させていくのかについて探求した。

また、この年度の作業の一つに、附属小学校の英語活動カリキュラムと中学校のカリキュラムの対応一覧表作成がある。そこで見られたことは、附属小学校6年間で学ぶ英語の言語材料は、中学1年生で学ぶ言語材料をほぼ全てを網羅しているということである。この事実をいかに受け止め、中学校でそれを活かしていくのが大きな課題として見えてきた。

③ 平成18年度の研究

この年度の学校全体の研究テーマの副題は、「コミュニケーション力を高める実践研究」であった。そして、コミュニケーション力を高める一つの授業形態として、異学年交流授業を試みた。この授業形態は、異年齢が混ざり合っていたであろう「*寺子屋」の形態、また、異年齢の人間同士の活動が普通である実社会の実態に基づいて採用したものである。英語科では、2・3年生の交流授業と1・2年生の交流授業を実施した。成果や課題などについては後述（p.95）する。

この段階で、附属小学校との異校種間交流授業を進める機はまだ熟さなかった。ただ、異年齢同士が交流する際に考慮しなければならないことが見えてきた年度であった。普段の学校生活における人間関係づくり。誰にも遠慮することなく発言し、それらを受容していくことができる「授業風土」づくり。相手を思いやって聞く・話す態度の育成など、異校種間交流授業を推進していく前に何を準備しなければならないのかを整理することができた年度であった。

④ 平成19年度の研究

この年度から、学校全体の研究テーマの副題が「異学年・異校種間交流授業を通した学び」となり、一部教科で試行していた交流授業を全教科で一斉に取り組むことになった。附属小学校の全面的な協力があって異校種間交流授業が実現した。中学校は2年生の選択授業を取っている生徒対象。小学校は4年生のクラス対象。4回の交流授業をおこなった。小学生と中学生が交流する中で、英語科として何を学び取らせることができるのか。また、児童生徒の心の何を成長させることができるのか。さらに、小学生の中学校への橋渡しの一助となるかなどを考えながらの実践となった。こちらも、成果や課題などについては後述（p.95・96）するが、一定の成果が得られたと考えている。

この年度、他教科では高等学校と交流授業を実施したところがある。英語科では、平成16年度に発

*寺子屋：年齢の異なった様々な学習者が同じ場所で学び合っていた江戸時代の寺子屋を、本校研究において異年齢交流のひとつの例として、しばしば引用している。

達段階の研究を実施して以来、小・中・高のわたりの問題を念頭に置いてきた。もし可能であれば、次の年度に高等学校との交流授業も試みて、小・中・高の英語教育の流れの中で総合的に連携を考えてみたいと考えた。

(2) 異校種間交流授業のねらいと位置づけ

① 異学年交流（平成18年度）の成果と課題

成果

- [1] 上級生が「自己有用感」を持つことができた。
- ・発表やスピーチの場で、下級生にとってよきモデルになることができた。
 - ・下級生の発表やスピーチに、適切なアドバイスを与えることができた。
 - ・発表の前段階で、スピーチや発表内容を「考えて書く」ことには慣れてきており、より分かりやすい表現を心がけるなどといった配慮ができた。
- [2] 下級生が上級生の姿を通して、将来の目標をイメージすることができた。
- ・上級生の発表やスピーチを見聞きすることで、自身が参考にすべきことを学べた。
 - ・上級生からアドバイスを受け、それまでに自分が気づけなかった改善点を知ることもできた。

課題

- ・コミュニケーションの中の情緒的な表現力の不足。「豊かな表現」で話す、読むことに抵抗がある生徒は多かった。アイコンタクトは取れるのだが、表情に気を遣ったり、ジェスチャーを入れて話せる生徒は少なかったため、そのような配慮ができる生徒をより多く育てていきたい。
- ・聞き手のことを意識し、分かりやすく話そうとする生徒の姿勢があまり見られなかった。恥ずかしさのあまり、「ゆっくり」「はっきり」話すよりも早く自分の発表を終わらせようとし、声が小さかったり、速かったり、ぶっさらほうにただ言い放つだけ、という感じになってしまう生徒もいたため、聞き手に分かりやすい話し方を意識させたい。
- ・相手の言うことが聞こえなかったり、疑問に思ったことがあっても、遠慮して質問をしない生徒も見られたため、そのような状態を放置しない態度を養いたい。
- ・お互いの緊張感がとれず、グループ活動がややぎこちなくなった。授業はじめのアイスブレイキングがうまくいかなかったことが原因のひとつとして考えられるので、初期段階での交流の持ち方に工夫が必要である。
- ・我々教師側の予想や期待に比べ、上級生が下級生をリードする場面が少なかった。上級生としての意識を高めていきたい。
- ・安心して積極的に発表でき、間違えても恥ずかしく思わず、聞き手側も優しい態度で臨む、といった雰囲気作り、すなわち「授業風土作り」が十分ではなかった。普段の授業実践から改善していく必要がある。

② 小中交流（平成19年度）の成果と課題

成果

- [1] 上級生が下級生に対して「優しく教える」ことができるようになってきた。
- ・当初はぎこちなかったお互いの交流が、回を重ねることによって自然なものになっていった。その中で、中学生が小学生に発表の練習をさせたり、上手に言えた小学生をほめたりする場面がしばしば

ば見られ、小学生のうれしそうな表情を見て中学生は自己有用感を高めることができた。

- ・中学生がグループ活動をリードしていくことができるようになっていき、グループ活動が円滑に進むようになっていった。

[2] 下級生が上級生に対して「親しみ」を持ち「信頼感」を増すことができた。

- ・数回の交流授業の中で、中学生と協力して行わなければいけない課題を与えられたとき、中学生の教えやアドバイスを聞き、自信をつけて発表する小学生の姿が見られるようになった。

[3] グループ活動や全体発表の場で、お互いに分かりやすく伝え合う、優しい気持ちで聞きあうことができるようになった。

- ・中学生は、普段のペースで話していても小学生には通用しないことを身をもって理解し、「分かりやすく語りかける」ことの重要性を学んだ。
- ・発表の場で中学生も小学生も真剣に臨み、なおかつ発表を楽しむことができていた。クイズの出題に真剣に聞き入る姿や、答えを当てたときの満足そうな小学生の表情をみて、その隣りで微笑んでいる中学生の姿を見ることができた。

課題

[1] 数回の交流授業のうち、最初の2回の授業は双方にとって学びの少ないものになってしまった。双方にとって学びのあるものに改善する必要がある。

- ・1回目は中学生だけでなく、小学生にとっても課題が易しすぎたようで、お互いに“something new”がない授業になってしまった。中学生に親しみは湧いても、懂れるまでには至らず、中学校で習う英語はこんなに簡単なのか、という印象を与えた。知的な発見がある要素を授業に取り入れたい。
- ・2回目は、英語は難しかったのだが、「英語が分からなくても内容が理解できてしまう」という紙芝居の授業になってしまった。小学生としては「一寸法師」が“Little One Inch”だというように、部分・断片的な英語を学ぶことができたが、中学生の表現力の不足により「豊かな読み」からは遠くかけ離れた授業になってしまった。中学生に表現豊かな読みを指導する場が必要である。

③ 今年度の研究のねらい

上記の成果と課題から、今年度は中学生と高校生の異学年交流を行うことによって、昨年度とは異なり、下級生としてどのように上級生と「共に学ぶ」べきかを考察したい。

昨年度の小学校4年生と中学校2年生では学年が離れすぎており、発達段階を見てもずれがあり、英語の習熟の面から課題の設定や実際の授業の場でうまくいかないことが少なからずあった。今年度の中学校3年生と高校2年生の交流においては、同じ発達段階にいる両者はある程度英語に習熟しており、実践できることや表現することのバリエーションも小中交流授業よりは確実に増すことが予想される。また、学習形態も小中生同士よりは中高生同士の方が類似している。小学生は床の上に座り、授業中にも動きを多く取り入れながら学び、話す、聞く機会は多いが、書いたり読んだりする機会は少ない。中高生はいわゆる「座学」中心で、書くことや読むことなど、4技能を全て学ぶ。

以上のように中高生の交流は、小中生の交流時に見られた独特のギャップや戸惑いは少なく、学習活動も比較的スムーズに進むものと思われる。同じ発達段階にある中学生と高校生の連携をどのように進めていくのかを、昨年度の反省を踏まえ、比較、検討していきながら実践を進めていった。以下に、今年度の研究の経過を記す。

3. 今年度の研究

(1) 今年度の実践の経過と予定

- 5月 下旬 中高教員による打ち合わせ①
- 6月 上旬 中高教員による打ち合わせ②
- 6月 23日 第1回中高交流授業と反省会
- 9月 中旬 中高教員による打ち合わせ③
- 10月 上旬 中高教員による打ち合わせ④
- 10月 中旬 中学校、高校各々で交流授業に向けての準備授業
- 10月 中旬 第2回中高交流授業
- 11月 上旬 中高教員による打ち合わせ⑤
- 11月 上旬 第3回中高交流授業
- 11月 中旬 中高教員による打ち合わせ⑥
- 11月 21日 第4回中高交流授業（研究発表会）
- 11月 下旬 今年度の反省

高校生との交流授業を行うにあたって、過去2年間の反省を踏まえ、以下のことに留意しながら研究を進めていくこととした。

① 他者理解力・自己表現力の情緒的な面

- ・交流授業の回数を重ねることによって、中高の生徒同士が親しくなる。
- ・高校生に遠慮せず、分からないところなどを積極的に質問し、自分の意見をはっきり述べる。
- ・高校生の姿を通して、自分の将来あるべき姿勢や英語力をイメージする。

② 他者理解力・自己表現力の知的な面

- ・お手本となるような、または参考にすべき表現や態度などを理解し、吸収する。
- ・高校生のやや難しい表現などを自分なりに理解し、可能ならそれらを使用してみる。

③ 教師の役割

- ・中高互いの教師がそれぞれの英語力を把握し、共に学び合いやすい課題を設定する。
- ・中学校教師が高校生を、高校教師が中学生を知る。

今年度は高校2年生の文系教科を履修している生徒と、中学3年生の選択英語履修者による交流授業を計画した。今年度のたまかな流れを高校の先生と打ち合わせる中で、主にライティング中心の授業とスピーキング中心の授業を行うという、2本の柱ができた。ライティングの授業は高校教師が主導で、スピーキングの授業は中学校教師が主導でそれぞれ行うこととなった。

(2) 第1回目の交流授業（6月23日）について

第1回目の交流授業はライティング中心の授業を行うことにした。高校で継続してライティングの指導を行っており、高校生はさまざまな形で「書くこと」を経験している。高校生は中学生との交流授業でも、それらの経験をもとに中学生をリードしながらグループ活動を引っ張っていくことが出来るのではないかと考



えた。同時に、中学生は高校生の使用する英語に触れ、未習のやや難しい表現を学び、高校生の学ぶ姿勢や英語力に対して、あこがれや自分の近い将来の目標を多少なりともイメージできるよう、意識付けたいと考えた。

ただ、高校生にとっては、英語での中学生との交流授業が初めてなので、大いに戸惑うことが予想された。したがって以下の点を協議しながら授業案作りを行った。

- ・昨年度の小中交流時の反省から、授業を開始するときのアイスブレイキングをしっかりと行うことを確認した。協議の結果、班内で自己紹介を行うこととし、互いの緊張感をほぐし、以降の班活動へ入りやすい雰囲気を作り出せばよいと考えた。
- ・当初は授業前に、ある程度の事前準備を行う必要があると考えていたので、自己紹介やライティングのどんなことをどの程度まで準備すべきかを協議した。しかしながら、今回の授業では「あえて事前あまり用意をしないで活動させてみる」ことを申し合わせた。これまでの日々の積み上げでどの程度まで課題を解決できるか、また、そのためにお互い協力できるかをまず見てみることにした。
- ・積極的にライティングに参加できない中学生がいることが予想されたので、高校生に任せっきりにならないよう、中学生は積極的に意見、質問を述べることで、高校生は中学生をリードすることのある程度事前に意識づける必要があることを確認した。

以下に指導案を示す。

中高交流授業 学習指導案

平成20年6月23日(月)

7限 2階 物理講義室

指導者 鈴木 達也

小川 正清

1 単元名(題材) Writing Activity “Summer Holidays”

2 目標

(中学生)

- ・高校生とともに学ぶことによって、よく使われるが未習であるいくつかの表現や、既習の簡単な英語を使って「夏休み」について、表現力を伸ばすことができる。

(高校生)

- ・中学生とともに学ぶことによって、パラフレージングをするなどして、シンプルで分かりやすい表現をしたり、活動時に中学生をリード、サポートすることで自己有用感を得ることができる。

3 評価の観点および規準

② 表現の能力

- ・「夏休み」という題で、ストーリーを組み立て、書くことができる。

4 指導にあたって

【教材観】

「夏休み」というトピックに関しては生徒は親しみやすく、さまざまなことを連想することができる。ただ、それらのことを英語で表現することに関しては、普段の授業の中でもそう多く取り扱っ

て来なかった。今回の交流授業では分からない表現はまず自分で考えながらも、グループ内の中学生・高校生とともに考え、より分かりやすいものを選んで書かせたい。また、机間指導をしながら語彙指導を行っていくつもりではあるが、その際にもあまり直接答えを教えるのではなく、ヒントを出しながら自分達で考える余地を残したいと考えている。

【生徒観】

選択英語を履修した16名の生徒である。授業に対する取り組みを見れば全体的に真面目で堅実な生徒達である。個で行なう作業は集中して行なう生徒が多く、英語の歌なども声を出して歌う。そんな中で難易度の高い英語を理解するのが難しい生徒が数名おり、言葉かけや支援、時には注意も必要となる。この題材は主にペアで、もしくは少人数で行なう会話が中心なので、交流の中で、互いに高め合うよう意識させたい。

高校生は文系クラスの中の18名の生徒である。リラックスした雰囲気の中で授業を受けている生徒が多く、それでいてすべき時には集中して活動を行うことができる。リーディングの声も良く出ており、ペア活動にも慣れている。

【指導観】

ライティングの指導はたびたび行っており、作文をすることには中・高生とも抵抗はあまりない。しかしながら中学生にとっては、今回のように話をつなげていきながら自分達でショート・ストーリーを組み立てていくような活動をするのは初めてであり、戸惑いが予想される。また、中高教師同士で「事前にあまり用意をしないで活動させてみる」と申し合わせており、放っておけばこのような活動に慣れている高校生に任せ切りになることも予想される。高校生には中学生をリードしながらも意見を引き出してくれることを期待したい。

中学生としては、高校生から「表現」そのものを学ぶ機会としたい。その際、やや難しいが、よく会話で使うフレーズがあってもよく、高校生にあまりレベルを下げさせないようなアドバイスも必要である。中学生が今までに習った、知っている範囲での、分かりやすい言い方とも織り交ぜて、楽しい作文ができればよいと考えている。

高校生としては、シンプルな表現を学ぶ場としたい。その際、中学生が知らないと思われる文法事項を含む文を分かりやすくパラフレーズさせたい。その上で、上記のように中学生にとっては未習でも、よく使われる表現は中学生に教えながら使っても良いと思われる。また、自分達が中学生の学習の手助けをすることができた、という自己有用感や学習に対する自信を持たせることができれば、と考えている。

5 指導計画および評価計画（総時数4時限：不連続の時限）	評価計画
第1次 夏休みについての作文とその発表。【本時】	②
第2次 ある話題についての表現の習得と会話。	①②
第3次 ある話題についての表現の会話を発表する。	①②

6 本時の学習

(1) 題材名 「夏休み」という話題での作文とその発表。

(2) ねらい

- ・高校生とともに学ぶことによって、よく使われるが未習であるいくつかの表現や、既習の簡単な英語を使って「夏休み」について、表現力を伸ばすことができる。

(3) 評価の観点及び規準

② 表現の能力

- ・「夏休み」という題で、前後のつながりのあるストーリーを作ることができる。

(4) 本時の展開

学 習 活 動	教師の指導・支援及び留意点	評価規準及び方法	時間
1 Greetings ・あいさつ、お互いにQ & A形式で自己紹介をしあう。	・高校生に質問をしてもらったり、どんどんリードしてもらえらるような、それでいてリラックスした雰囲気ができるような働きかけをしたい。		7分
2 Today's Goal ・本日の活動の目標を聞き、理解する。	・分かりやすい表現、よく用いられる表現、「夏」に関する表現を学び、全員で積極的に関わりながら作文をするという意識を持たせる。		3分
3 Demonstration (Listening & Watching) ・「夏の思い出」に関する作文の例を中学教師、高校教師が示し、それらがひとつになる過程を見る。	・架空の物語を作る過程と、作品そのものを例示し、イメージをつかませる。あまり多く出し過ぎないようにさせたい。		6分
4 Writing ・中学生、高校生で交互になるように1つのパラグラフごとにプリントを回しながら文を考え、書いていく。	・グループによっては高校生がすべて記録をとっても良いし、一人ひとり回しながら書いていても良い。	◎「夏休み」という題で前後のつながりのあるストーリーを作ることができる。 (②表現の能力)	24分
5 Presentation ・まとまったものをグループごとに発表する。残りの生徒は聞いて内容理解に努める。	・発表する形態は班内の生徒で考えさせたい。 ・聞く生徒はただ聞くのではなく、話の概要をつかませたい。	[観察]	10分

授業後の反省と課題

- ・自己紹介の活動をアイスブレイキングと位置づけて行ったが、相手を知ろうという意識の高い生徒とそうでない生徒の間に差ができ、次の活動への橋渡しにはならない班もあった。今回は、引いたカードに書いてある話題(“club activity” “teacher” など)について自分のことを話すようにしたのだが、お互いに打ち解けることができたかと言えば、充分ではなかったと思われる。自分の話しやすいことを話したり、予め自分の話すことを考えておいたり、Q & A形式でお互いのことを知るなど、何か別の方法があったのではないかと思われる。また、時間ももう少し多めに取るべきだった。
- ・高校生が十分に英語力を発揮し切れていなかったように思われた。普段の授業ではもう少しスムーズにライティング活動に取り組んでいたのだが、中学生がいることで使える語彙に制限がかかってしまったと感じた。また、中学生に教え、意見を引き出そうとしているうちに課題に対して充分に対応できなく

なってしまった生徒もいた。

- ・中学生にもう少し積極性が必要だった。高校生の使う英語に対して感心はするものの、疑問に思うことを質問し、自分の意見をぶつけてみるような様子はあまり見られなかった。高校生に頼ってばかりいると学びはそう多くない、ということ意識付けていく必要性を感じた。
- ・ライティングの活動そのものの時間が足りなかった。そのような状況では、必然的に中学生と高校生が交流する班活動の時間も短くなる。高校生は中学生に意見を聞く時間の余裕がなかった生徒も多かった。中学生が消極的な班は、ほとんど高校生が進めていってしまったことも、時間の不足がひとつの要因である。もし次回ライティングを行うとすれば、もう少し課題の量を少なくして時間に余裕を持たせる必要がある。

(3) 第2回目の交流授業（10月20日）について

第2回目の交流授業では、スピーキングを中心にした活動を計画した。第1回目の反省を踏まえ、以下の点に留意しながら授業案作りを行った。

- ・課題が中高生双方にとって、時間的にも難易度的にも若干の余裕があるものにする。
時間的な余裕を持ち、中高生の交流場면을意図的に増やしたい。また、難易度を若干下げることによって、高校生はリードしやすい、中学生にとっても英語が口をついて出てきやすい状況を作り出したい。
- ・中学校、高校ともに第1回目の交流とメンバーが変わり、互いに英語の中高交流授業は初めてなので、アイスブレイキングの手立てを考える。ひとつの方法としては、その日の授業の最初か前の日に英語ではなく日本語で自己紹介をし合ってみる。
- ・中学生、高校生がそれぞれ授業前に前もって少し準備をしておく。自己紹介や、そのトピックに対して語彙を調べておく。ただし、あまり準備させすぎないように注意したい。

また、中学生には以下のようなことを確認した。

- ・自ら積極的に活動に参加することで学びが多い学習になっていくので、どんどん積極的に質問や発表を行う。
- ・普段の授業から心がけているアイコンタクトや簡単なジェスチャーを交えた会話、相手に少しでも伝わりやすいように、はっきりとした、適度なスピードの会話を心掛ける。

この紀要原稿を執筆している現在、この2回目の授業はまだ行われていないので、反省点や今後の課題を記すことはできない。今後の異校種間での交流授業や日々の授業での実践を通して、さらに「他者理解力」と「自己表現力」の伸長を図ろうと考えている。

4. おわりに（成果と今後の課題）

今年度の中高交流授業の取り組みについて、現段階での成果と課題を挙げておきたい。

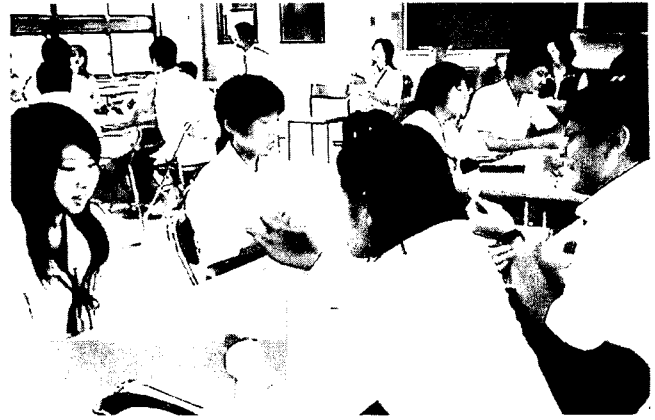
(1) 成果

- ・中学生が高校の授業に対するイメージを持ち、高校生の学ぶ姿や教師の教える姿を見ることによって憧れや将来のあるべき姿を想像できる生徒がいた。ただし、その数はまだ多くないので、今後の取り組みによって、「良き学習者」という自分の将来像を描くことのできる中学生を増やしていきたい。
- ・中学生に分かりやすい表現を用いて、中学生の意を汲み取ろうとしている高校生も見られた。こちら

もまだ少ない人数なので、今後の取り組みによって、高校生も中高合同授業の意義を実感できるような取り組みを行う必要がある。

(2) 課題

- ・ 高校生のリーダーシップ，中学生の意欲的な姿勢を引き出す課題設定が充分ではない。双方にとってきっかけがつかみやすい，かつ中高生同士が協力する場面が多くある課題，活動を授業の中に盛り込む。その際，難易度や時間配分にも充分な配慮が必要である。



(後姿が高校生，こちらを向いているのが中学生)

3年間に渡る異学年，異校種間の交流授業の研究は今年度でひとまず区切りをつける。成果は下記の通りであり，我々教師側にとっても生徒達にとっても貴重なものとなったが，課題も依然として残っており，今後，交流授業のみならず，普段の授業においても継続した指導を行っていきたい。

(1) 成果

① 「他者理解力」について

- ・ 上級生が下級生にさまざまな配慮をしながら交流を行ったとき，相手の言うことを懸命に聞こうとすることの大切さを理解し，時には自分で言葉を補ったりしながら考えて理解を進めることができた。また，下級生が行った発表などに対し，自分が理解したということや，とてもよくできていたということを知りやすく伝えることがいかに下級生の自信につながるかを理解し，そのようなことを行う中で自己有用感を持つことができた。
- ・ 下級生は上級生の言っていることが多少難しくても，興味や関心を持って頑張って理解しようとする姿勢を身につけるようになってきた。自分が「理解していない」ことを上級生にはっきり伝えることで，さらに丁寧で分かりやすい説明を受け，より確かなコミュニケーションを図れるようになっていった。

② 「自己表現力」について

- ・ 上級生は下級生の立場に立ち，自分が過去に学習してきたことを思い出すことで，自己表現を理解しやすい，易しいものに置き換えることが出来るようになってきた。また，相手に伝わるような「はっきりした」「適度な速さの」話し方を習得していった。
- ・ 下級生は上級生が使うやや難しい表現や，既習の語の別の使い方，上級生の英語力や学ぶ姿勢に触れ，上級生への憧れや，近い将来への目標を持つことができるようになっていった。

(2) 課題

① 「他者理解力」について

- ・ 交流授業において，相手のことをしっかり理解しようと聞いていた姿勢が，同学年で行われる普段の授業において見られないことがある。交流授業において学んだことを思い出させながら，聞くことの大切さを思い起こさせたい。
- ・ 「分からなかった」ということを「相手に悪いから」などといった理由から，そのままにしてしまう生徒もいまだに見受けられる。「分からないまま」にしておくことが，今自分が困るだけでなく相手も困り，今後の授業が深まりのないものになってしまうことを意識させたい。その場での理解の

確認、聞き直しをさせることなどの指導が必要である。

② 「自己表現力」について

- ・時として普通の授業の中で「相手に分かりやすく伝える」ことを忘れる場面がしばしばある。主に、自分の発表などに自信がないときや時間などに余裕がないときに、発表が「小さな声」「早すぎ」や「うつむいて」といった状態になってしまう。練習時間を多めに取ってやることや、失敗を恥ずかしく思わなくてもよい「授業風土作り」を継続して行っていく必要がある。

我々にとって大切なのは、研究によって得られた成果を維持するために、異年齢間での交流を続けることだけでなく、普通の授業にもその成果を還元し、定着させていくために日々地道な実践を積み重ねることである。そのためには時間の制約など難しい問題もあるが、取り組みを少しでも無駄のない、シンプルで継続しやすいものにしていく工夫も、今後、必要となるであろう。